

元司法研修所教官コラム①

あるクラスの日々

Shigeru Furuta

【当会会員】古田 茂 (49期)

元司法研修所教官(刑事弁護)

◆某月某日、教えることを学んだこともなく教わることも苦手だった自分が、いったい何をどうやって教えるのか。半ば暗澹たる気持ちのまま始まった教官生活だったが、そんな気持ちもいったん教室に足を踏み入れるとたちまち雲散霧消した。

ビフォー・アフター、ずらっと並んだピュアな瞳と、四半世紀の実務にまみれてすっかり濁った目。そうか、彼ら彼女らの興味は、いったいどんなものを食ったら、こんな弁護士ができてあがるのかということだと思えば気負う必要もない。実務での1シーン、1シーンを思い返しつつ、そこでの経験や苦労を少しでも追体験してもらえれば良いと思うと、開き直れた。思い返しつつ、経験や苦労を言語化する作業は、自分自身にとっても新たな発見につながる作業であった。

◆某月某日、模擬裁判的なカリキュラム。被告人と被害者とのもみ合いの状況に関する尋問というありがちなシチュエーション。弁護人役がその状況を質問していく。事実を細分化し、流れに沿って聞いていくなど、尋問のセオリーを意識して頑張っている。当時の状況がスローモーションで再現される。なるほどよく分かる。しかし、まるで太極拳だ。もみ合い事案は、双方が必死

でもがいていることがお互いの行動や意識にかなり影響を与える、とすれば、生のヒリヒリしたスピード感が伝わらなければ、一番大事なことが伝わらない。

弁護士の仕事は、依頼者にしか見えていないものを見る努力をし、何とか見えてきたものを裁判官や裁判員に見えるよう、あらゆる工夫を尽くすところにある。そのため、まずは現場に行き、本人になりきり、再現し、腑に落ちるところまで持っていかなくちゃ。

ケーベン教官は、ここぞとばかりに教壇から降りる。「そんなスローなわけないだろ。私が被告人役になるから、君は被害者役になって胸ぐらを掴んでみなさい。」と体を張ってみせる。修習生はおそろおそろ教官の胸ぐらを掴む。「だろ。そこで、こっちは逃げようとするんだ。」体をぐっと引くと修習生は引っ張られて前に倒れそうになるはずだ、その勢いを再現しなくちゃ。

カ一杯体を引くと、ビリッ。ケーベン教官のワイシャツは、上から下まで縦にきれいに裂けた。シーンと静まりかえる教室。刑裁教官が「過失の器物損壊は不可罰です。」とフォローにならないことをつぶやく。「ほら、やってみないと分からない。」とケーベン教官も悲しくつぶやいた。

◆某月某日、今はコロナ禍でなかなか難しくなっているようだが、クラス旅行であったり、懇親会であったり、事務所訪問であったり、研修所外での修習生との交流は教官にとっての楽しみの一つである。

ケーベン教官のクラスでは、諸般の事情により、研修所横の樹林公園でのBBQを企画しなくてはならない羽目になった。BBQ場の隣には絶好のランニングコースがある。ケーベン教官はマラソンが好物である。走らざるもの食うべからず。こうして、駅伝&BBQが企画された。1時間20分の間に1周1kmのコースを交替で走り、周回数が多いチームが勝ち。修習生チーム2チーム対ケーベン教官一家チーム(3歳の王子と2歳の姫付き)の対抗駅伝。運動不足の修習生は1km6分くらいではないかと高をくくっていたら、意外にも2チームとも平均1km4分台前半。さすが修習生、やるときはやる。駅伝にはクラスの半分くらいが参加し、BBQが始まると、走らざる者が更にぞろぞろ。築地買出しチームからは伊勢エビまで届いた。我が家の王子と姫は修習生を家来に従え、楽しい秋のイベントとなった。

修習生の皆さんからプレゼントされたかわいいリボン柄のワイシャツは、我が家の家宝である。 ■